令和５年度　若桜町総合教育会議　議事録

１．日時　令和５年１１月２８日（火）午前１０時００分から午前１２時０５分

２．場所　若桜町保健センター２階　大研修室

３．出席者　町長　上川　元張

教育委員会　教育長　盛田　恭司

委員　伊井野　早苗

委員　福田　浩子

委員　森岡　則明

委員　永原　直子

オブザーバー　教育委員会事務局次長　小林　貴之

教育委員会事務局次長補佐　西田　彰訓

教育委員会事務局次長補佐　岡﨑　晋相

事務局　総務課課長　山口　由企夫

総務課主事　奥本　莉奈子

４．議事録署名人　委員　福田　浩子

委員　永原　直子

５．協議事項

（１）少子化に伴う若桜学園の将来の児童生徒数の見込みと対策

（２）部活動の地域移行

（３）ふるさと教育

（４）鬼ヶ城の整備・活用

会　議　の　経　過　概　要

１　開会（山口総務課長）

2　あいさつ

上川町長　皆さん、おはようございます。今日はお忙しい中総合教育会議に御出席いただきましてありがとうございます。先ほどまでエスマートの開店セレモニーに出席しておりましたけれども報道もかなりたくさん来ていて、町民の皆さんもたくさん来ていただいており凄くにぎわっておりました。品ぞろえもかなり豊富になっておりました。総菜について、今回エスマートさんは厨房を作ってそこで調理し、総菜コーナーに出すという形になっており、良かったなと思います。ぜひこの機会に皆さんもたくさん買い物をしていただきたいと思います。

さて、本日の総合教育会議ですが、議題を４つ準備させていただいております。１つ目は少子化、若桜学園の子どもの数が徐々に減ってきているというような事に対しまして、今のうちから手を打っておかなくてはいけないのではないか。一昨年子どもの数が２人という年もありましたけれども、複式学級というのが現実問題として何年か後には考えていかなくてはいけません。例えば島根県の隠岐の島では、子どもを確保するために島留学という、全国から高校生を連れてくるといった取り組みを行っています。そういった問題意識から提案させていただきました。

２つ目の部活の地域移行につきましては、今県教委を中心に非常に大きな課題です。先生の働き方改革も大切ですし、土日の部活をどうしていくかが課題です。受け皿をどうするのかという問題もありますし、若桜町の実状に落としどころを探っていかなくてはいけないのかなと思いますけれども、大事なのは子どもの個別の可能性といいますか、その芽をしっかり育てていけるような、発想をしっかり持ちながらいけたら良いなと思っております。

３つ目のふるさと教育ですけれども、これにつきましては将来の町を支えていただく子どもたちをどう育てていくのか、地元愛をどう育んでいくのかという大変大切なテーマだと思っております。この間７年生が中之島公園で階段アートを自分たちで作りましたけれども、あれは今年の１月に生徒たちが６年生の時に子どもシンポジウムで提案をしていただいた中で、これは面白そうだなということで、町の予算を付けました。自分たちで提案して、自分たちでやるという形で。若桜のスポットといいますか、PR になるような場所、写真映えするような物を作って SNS などで発信したいという子どもたちの思いがあのような形で叶って良かったなと思います。１２月号の広報わかさの表紙に採用させてもらいました。夏には夏いちごのスムージーを９年生がやまねやさんと、アルパインと共同で作っていただいたのですが、あれも今の９年生が８年生の時に総合的な学習の中で町の総合計画を勉強していただいて、その中で経済産業の活性化をテーマに色々

子どもたちなりに調べていただいて、私も少し授業の中でお話をさせていただくというような事もあったのですけれども、そのような中で新しい特産品を作っていただきました。これも子どもたちの提案がきちっと形になってよかったなと思っております。そういうことで一例ですけれども、子どもたちが地域をどういうふうに活性化していくかという発想を持って、自分たちで提案し実現する良いふるさと教育の実践になったと思っております。

４つ目の鬼ヶ城ですけれども、これは若桜町の宝といいますか、大事な文化財でございまして、是非この良さというものを地元の町民の皆さんに知っていただいて、それと併せて外にも発信していくという取り組みが大事だと思っております。雑木が茂って眺望がかなりよろしくなかったので、教育委員会の方で昨年度から４ヵ年計画くらいで場所を限定しながら雑木の伐採を行っています。保安林に指定されているため年間５０本しか切れないという制約の中でやっていただいています。今年２年目という事で山頂からの景色がだいぶん良くなっています。なおかつ、草刈りボランティアを募集していただいて、石垣の周りを綺麗にしていただいて、上からもそうですけれども、下から見上げても非常にすっきりしました。城跡があそこにあるなというのが分かるような感じになったなと思っております。こういう文化財をしっかり守り育てて次の世代に繋いでいくというのは非常に大事なことだなと思っております。

そういうような事でテーマ設定をさせていただいておりすけれども、教育は国家１００年の計といいますし、子どもたちの教育というものが将来の若桜町を支えていく事になりますので、今後とも教育委員会と町としっかり連携して取り組んでいきたいと思っております。どうぞ本日は有意義な意見交換となりますよう、よろしくお願いいたします。

３　議事録署名人の指名

上川町長　福田委員、永原委員を指名

４　協議事項

（１）　少子化に伴う若桜学園の将来の児童生徒数の見込みと対策について

小林次長　資料①をご覧ください。この資料は若桜学園の方から提出いただきました児童生徒数の推移表となっています。小学校の令和５年度の所を見ていただきまして、児童生徒数は７０人ということになっておりますけれど、７年後の令和１２年には５１名と大幅に人数が減少する見込みとなっています。中学校の方は令和５年度に３６名いた生徒が１０年後の令和１５年になりますと２９名となりまして、さらに令和１６年には２０

名を切って１９名になる見込みです。全体的な学園の人数を見てみますと、令和１０年度になりますと８８名となりまして１００名を切って二桁台ということが予想されます。先ほど町長さんの方からも言われましたけれどもこの先どう対応していくかという事が早急に議論していく必要があります。

次の資料の１番、年度別入学予定者数でございます。これは令和６年度から令和１２年度までの入学予定者数を記載したものでありまして、特に令和９年度、令和１０年度、令和１２年度につきましては、一桁台ということで、これを全部平均してみますと、平均で９名ということになっております。

次に②のところには県の複式学級の設置基準が記載しておりますし、③には県の学級編成標準を記載しています。次に２番目の通常学級年度別児童生徒数になりますけれど、小学校の方では真ん中の表の右側の方にある令和１０年度につきましては先ほどの基準を照らし合わせてみますと１年生は２人ということになりますけれど、基準によって複式学級を実施しないということになります。しかし、１１年度以降につきましては、２年３年生が複式学級にそれ以降も３年４年５年６年と複式学級が続いてきております。また、中学校につきまして令和１６年度は７、８年生が複式学級、１７年度についても８、９年生で複式学級が想定されております。このまま少子化が進むと将来的には学園の存続も難しくなることが懸念されます。

次に３番の特別支援学級生徒数の推移ですが、薄くなっている所が知的学級、少し黒くなっている所が自閉・情緒学級となります。全体の人数だけみましたら、特別支援が必要な児童生徒数は減少しているようにも見えますが、実際のところは支援を必要とする児童生徒は在籍していると考えておりますので引き続き状況に応じた町の支援員の配置が必要であると考えております。

次に対策としましては、まず現在行っております移住定住対策と絡めた自然の中で学ぶ子育て支援と若桜町の魅力の情報発信を継続することが必要であると考えております。また、その他には公共施設、学校施設を活用した山村留学が考えられますが、実際は実施団体を行政主導で向かうのか、それとも民間委託で向かうのかといったことや、受け入れ方式を子どものみにするのかそれとも若者世代の家族全員を受け入れるのかといったことを全国の自治体等の成功例を参考にしながら検討を進めていきたいと考えておりますが、実際いろいろ調べてみますと結果としまして行政が先走って行うと中々上手くいかないといったケースも多々あるようですので、慎重に進めていきたいと考えております。

山口総務課長　先ほど説明にありましたように、令和１０年には学園全体で２桁台の児童生徒で、このままいくと学園の存続が危ぶまれるというような説明がありました。また、

その対策として移住定住対策で人口を増やしていく、また、山村留学等を取り入れて増やすことを検討されているとの事でした。これにつきまして、皆さんの方で意見交換をしていただけたらと思います。よろしくお願いしたいと思います。

伊井野委員　人口の減少の対策として移住定住の促進を見ておられるのですけれども、その実態ですけれども総合戦略で見ると令和４年が１６人となっていたものが訂正になって５人というような事でしたけれども、この近年の移住定住された人数とこの中に含まれる子どもの数といった推移は分からないでしょうか？

上川町長　詳細なデータは今持ち合わせていないのですけれども、コロナの前までは大体３０人くらいでした。コロナで相談窓口を閉鎖した時期もありましたのでそれでガクッと減って一桁といった年もあったのですけれど今年になって相談件数も昨年度よりも倍増以上になっていたり、移住者も昨年度より倍になっていたりと大まかではありますがそういう傾向になってきています。なんとか移住を進めていきたいと思っているのですけれども、入れる空き家がだんだん少なくなってきています。そういった選択肢が十分ではないので、空き家の開拓と併せて移住施策をしていただいています。人口減少対策として移住政策と少子化対策を両方しっかりやっていく必要があると考えています。

伊井野委員　その中で、若桜学園の１学級が２名とか５名というような学級が近々出来るというそういう実態が子どもを持った人や、これから子どもができるというような人が移住定住するうえでの心配事になってしまうのではないでしょうか。若桜の人でさえ、一学年の生徒数が少ないなら市内の方に出ようかというような雰囲気もあったりします。その辺を何とか、人数が少ないけれども対策をしているし、少人数の良さを活かした若桜学園へ行くと子どもの力を十分に伸ばしてもらえるというような特色があると良いと思いますが、実態として中々そこまでにはなっていないような気もしますし、その辺をどのようにしたらよいのかなと思います。デメリットの部分をいかにカバーしてメリットに変えていくのかということです。一学級２人というのが９年間続くというのは大変だと思うので、複式学級にして２学年合同で、学習はそれぞれ学習できるように町の方で先生を雇っていただくなどして対応して欲しいです。

上川町長　今少子化というのは若桜町ももちろんそうなのですけれど、全国的にも課題となっています。鳥取市内の遷喬小学校も生徒が少なく、一学年１０人くらいです。女の子が１人で残り９人は男の子で、その女の子は久松小学校の方に移るといった話も上がっているようです。やはり、市内でも街中過疎といいますけれども、どこも全国的にコロナの影響もあり大きな流れとして少子化というのがあります。全国で移住なんかでも競争になってくると思います。やはり一学年に生徒が二人とかになってくると、そこに通わせ

るのはどうだろうかと思われます。先ほど話にもあったように子育て世代も外に出てしまうかもしれないし、外から来たいと思っている人の障害になる可能性があります。なので、きちんと対策をとって、山村留学なら山村留学の実績が出てきたら効果が出ていることを外の人に大々的に伝えたり、あるいは逆手にとって少ない子どもたちをこのように手厚く教育ができるなどデメリットをメリットに変えていく事を併せて PR したりするといったことをしないと中々移住も進まないし、出ていく人もなくならないと思います。

永原委員　行政が主導でする移住定住は成功しづらいと言われました。やはり一番いいのは、今移住定住してきた人が若桜は良いところだよ、と横にネットワークを広げてもらうことが最も有効的だと思っています。行政が一生懸命旗を振って来てくださいというよりも、今来ている人たちや何年も住み続けている人たちが若桜においでよと、出身地の方の友人や知り合いや関わりのある人たちへ広げてもらう事が一番説得力を持っていると思います。そういうことを考えてみるとその方たちが核家族でおいでになっているとしたら、子育て時期って三世代で考えても若桜に三世代でこれまでも住んでおられたら、おじいちゃんおばあちゃんの手が借りられるのですけれども、核家族で来ておられた時に、たいてい今どきだと母方のお母さんがすごく重要なポイントだと思っていて、核家族で来られた方は実家が遠くてそういうちょっとした手助けをしてもらうことができません。だから、母親的な手助けをしてもらえるような雰囲気や体制があるといいのかなと思います。もうちょっとこうだったら良いのにというような微妙なニュアンスは分からないけれど、移住してきた人が他の人に勧められるポイントが若桜にはあるのかなと思う事があります。

森岡委員　交流センターの方に以前話を伺った時に、コロナになってから子どもがある世帯の移住が少なくなっていて年配の方の移住が増えてきていると聞きました。なぜだろうと考えたときに、若桜に少し住んでみたいという人たちが住める場所がないということを言っておられて、賃貸でアパート、一戸建てでもいいと思うのですけれど１年間、２年間とかで借りられるような賃貸があってそこでちょっとお試しで住んでみて良かったら空き家を購入する。今の状態だと空き家を購入しないと住むことができない、家を建てられないと住むことができないという現状もあって、ちょっと試しにどんな所か試しに１年間、２年間住んでみたいなという人達が選択することができないということも言っておられましたので、そういうものが必要になってくるのかなと感じました。

コロナ前の話だと思うのですけれども、この間も少し話に出ていて、こども園の体制で、保育士が足りていないから受け入れができないというような事もあって、来たい人達が来ることができない、若桜の人達でもここで預けられないから他所に出たりしたという

ような話も聞いていたのでその辺の受け入れの体制がしっかりしていないと、来たいと思っている人たちを排除してしまうのがすごく残念なので、そういう人たちが安心して受け入れができるような体制作りも事前に必要なのかなとすごく思いました。先ほど言っておられた山村留学というものはまだイメージが付かないのですけれど、それができたらとっても良いなという思いがあります。若桜ならではの山村留学ができるのではないかなと思います。巻米分校や吉川分校、寄来屋といった施設があるのでそういう所を上手く活用してやっていく事ができるのではないのかなと思いました。

上川町長　今、移住者目線で少し住むところというか賃貸で１年くらい借りて、良ければ空き家を買って本格的に住むといったニーズがあるのだろうなと思いました。賃貸という物件が町内ですと町営住宅はあるのですけれど、あれはもともと町民向けといった縛りもありますので、なかなか移住者に貸すという格好にはなっていません。なっていましたかね？

山口総務課長　町営住宅は公営住宅法という法律に基づいて作ってありますので、住宅困難者、夫婦の方などが入居できます。条件はありますけれど、住所を移せば入る条件は整うと思います。

上川町長　本当は民間のアパートなどがあれば一番良いのでしょうけれども、なかなか期待しづらい部分ではあります。町営住宅が一つの選択になると思うけれど、入ってきやすい、　ハードルをなるべく低くしていただけるような事というのは考えていかなくてはいけないと思います。それから、こども園の話がありましたけれども、こども園は保育士がなかなか足りていません。募集はずっとかけているのですけれども応募がなかなかないという状況です。今年は０歳児を預けたいという希望がかなり多く寄せられているのですけれども、０歳児は３人に１人つけなくてはいけないという他よりかなりハードルが高いものですから、全員の希望を受け入れると少し大丈夫かな？と、人が足りないことになるので、並行して募集かけながらなんとかしたいなと思っているところです。先ほどおっしゃられたように受け入れてもらえないので外に出られたという話がありましたが、具体的にどのような事例だったのか把握はしていないのですけれども、せっかく若桜に住もうと来ておられるのに保育がネックになってしまうというのはもったいない話なので、町としてもなんとか保育士の知り合いのつてなどを使って確保したいなと思う所ではあります。それから、山村留学の事はこういう自然の中でとても自由に遊べる環境というのがありますので、家族連れで定住してもらえるような仕掛けというのを計画してまいります。自然の良さというのを全面に出した移住施策をできたらなと思います。

盛田教育長施策として山村留学を含めて子どもたちを外からという話がありました。山村

留学について調べてみると、大きく三つくらいの形態があります。

一つ目が里親制度の山村留学。要は家庭に子どもを預かってもらって親代わりをする、そういう里親制度というものがあります。これはたくさん受け手がないと当然いけないです。ただ里親制度について一番課題になるのが、要は親代わりを全部していかなくてはいけないので、参観日であれば参観日に出席する、PTA 活動があれば PTA 活動に参加して草刈りなどをするなど、親代わりをずっとしていかなくてはいけないという事です。そういったことがあって負担感があったり、ご高齢になっていくとなかなか続かなくなったり、今年から辞めますということがあったりそういうような事が課題かなと思います。

二つ目がセンター方式の山村留学です。先ほどありましたが、廃校になったような、そういった所をセンターとして改装して生活できるようにし、やり方は色々ありますけれど、例えば指導員さんや調理師さんを置いて子どもたちが帰ってきたら必ずその方々が世話をするという形です。センター方式の場合は特に指定管理等を出している所があります。例えば若桜なら若桜の特徴を生かした活動を土曜や日曜日に子どもたちのために作っていく。例えば、冬になるとセンターが主催でスキーに連れて行ったり、あるいは夏場になったら登山があったり魚釣りしたりとか、そういう学校とは何か違うイメージで土日の活動というのがあって子どもたちがそこにやってきて学校に通って、土日はセンターでの活動もあるといったような方式があります。

三つ目は先ほどあった教育親子移住といった山村留学です。親子で一緒に来ませんかといった形で、空き家とかそういった所を、要は親子で入れる場所を提供してそこに入って　いただいて学校の方に通っていただくというような事です。移住定住の意味合いでいう教育移住の施策と山村留学の大きな違いは基本的には１年契約であるということです。例えば小学校１年で留学して２年になる時には再度契約していただく形で、毎年毎年見直しをして良ければ２年３年…と来られるし、やっぱり合わなかったなと思われれば次の所に行かれることもあるかもしれません。常に１年契約です。もう一つは、例えば何かトラブルがあったりなどで、逆に言うとこちらの方から契約の打ち切りをすることもできます。要は里親さんの指示に全く従わないというような事があったり、センターの規則に全く従わない、生活ルールを守れない、そういったことが続いたりしたら途中でも契約を打ち切りますよ、親元さんへ帰ってくださいと、そういったものが山村留学というものであります。

町の進める移住定住というやり方もあると思うし、このような山村留学を進めていくという形もあります。親子の山村留学は例があまり分からないのですけれども、三重県の松坂市の山の奥の方にある香肌小学校という全校生徒１９人くらいの学校ですけれど、

この学校は親子の山村留学を施策として進めています。高知県なんかだとセンター方式の山村留学というような形で、全校児童が２０人くらいですけれども、それよりも留学してきている子どもの割合の方が５割以上といった学校もある。やり方も色々だと思うので、例として見て若桜の今の氷ノ山があり八東川が流れ田畑があり、いろいろな体験ができるそういった所を売りにしていくのも一つの手かなと思います。

山口総務課長　先ほど伊井野先生から移住者に子どもは何人いるのかという質問がありましたけれどもそれについて、昨年度と今年度のデータなのですが、移住してこられた方が昨年度から現在まで１３名おられるが、子どもは０人だそうです。子どもはおらず、大人の方だけの移住ということです。それ以前につきましては今データを集計中で持ち合わせていないそうです。

伊井野委員　森岡委員も言われていましたが、大人の移住定住は多いが子どもは少ないということですね。世代が大きいってことなのかな、シニア世代。

森岡委員　多分そうだと思います。ゆっくり余生を静かに過ごしたいっていう方が増えているのかなと思います。そういう方を増やすのも大事だと思うけれども、やはり子育て世代を増やしていきたいですよね。

上川町長　やはり子育て世代をターゲットにした移住政策とか受け入れの体制、その辺りをまた、学園の子どもの減少というのを一つ対策ターゲットにしたチームを教育委員会と町の移住担当と検討チームを作った方が良いと思います。移住でどこをターゲットにするかという所も含めたことをやっていけたらいいなと思います。

森岡委員　金銭的には凄く支援は恵まれていると思いますので、それはそれで必要だと思いますけれども、保育園に安心して預けられるという、土日の保育もして欲しいと言っておられました。地元の人はおじいさんおばあさんが居られて預けることができるのだけれども、移住者ってなると頼れる人がいない中で土日に預ける場所がないと不安が大きいとも言っておられました。今は預けられないことも無いのだけれども、体制があまり整っていないからだと思うのですけれど、ちょっと嫌な顔をされるというような事を言っておられましたので、その辺の体制をしっかりとしていく事が大切だと思います。「どうぞぜひ、ようこそお越しくださいました」という体制になってほしい。

永原委員　若桜が先んじてしたようなことを、他所も追いかけてしているので、メリットが強烈なメリットになりにくくなっている。頼みやすかったり、声をかけやすかったり、安心して気楽に預けられる環境が良いと思います。知らない人ばかりの土地なので。

伊井野委員　テレビなどでも出産して親が遠くて、自分たち夫婦だけで子育てしなくてはいけない環境に支援してくれる人がいてその人に相談したり、ちょっと預けられるとこ

ろもあったりという番組をよくしている。今そういう社会的に皆そういうニーズが増えています。

福田委員　子育てファミリーの制度が何だかあるのですよね？子育て支援をするそういう家族に対して特定の人がサポートするというような仕組みが確か若桜にもあったはずだと思うのですけれども、なかなかサポートするよと手を挙げて下さる方が今のところないということはこども園の方から聞きました。

森岡委員　しっかりすればこども園が預けられなくても大丈夫ということですか？それはいいですね。

上川町長　時間いくら払うとかそういうそういうのでしたよね。ファミリーサポートシステムというのがあるのですけれども、中々受け手として手を挙げて登録する人が少なくなってきています。

伊井野委員　少しお医者さんに行く間２時間くらい見てとか、そういうニュアンスですよね。

上川町長　こども園まで行かなくても、ファミリーサポートシステムは、制度としてはあるので、もう少し登録者を増やす努力をしていただくように町民課の方に今お願いをしている所ではあります。

盛田教育長　子どもたちの数が減っていくというのは、保護者の立場からの危機感というのもあるし、一方行政として、教育委員会としての危機感もあります。特に中学校の方なのですけれども、中学校で子どもが減っていき複式学級などになっていくと、中学校の先生は週に１８時間を標準に授業を持たなくてはいけない事になっているのですけれども、１週間の割合が少ない授業例えば音楽、美術、体育などは合同ですればするほど一回で終わってしまう。そうなると、若桜学園に１人配置してもらえなくなる。要は他の学校と兼務でとか、授業のある時だけやって来て授業が終わったら帰られるといったことになり、職員の数がどんどん減ってしまう。そのようなことを心配しているところです。そうなると学園の先生自体が減っていく中で、今まで一生懸命されてきていた手厚い指導ができるかっていう所が、授業だけされたら帰っていかれるということになってしまいます。ですので、保護者の方の少ない人数の中でという心配もあるし、行政としても先生の数が減っていくということに危機感を感じています。中学校は教科担任なので、そこの辺りがちょっと心配だなと思っています。

上川町長　この問題についてはまた引き続き、教育委員会と検討を進めて行けたらなと思います。

福田委員　すみません、少しだけ、ちょっと方向性が違うのですけれども、伊井野先生がお

っしゃられていたように、少人数のメリットを活かすことは是非とも必要なことだと思うのですが、そこがなかなか特別な方法が十分に行かないというようにも見えます。先生方も多くおられるのではないかなと思うので、その辺りを上手に研究とか研修なんかを校内だけではなくICTの活用をもっと強く推し進めていただいて、若桜学園だけでなく他校との交流をしながら先生同士も交流し、生徒同士も交流して、他から刺激を受けてもらうのが良いと思います。若桜学園の中だけでは少人数ですが、オンラインを通じながら、研修なり授業改善などに取り組んでおられる地域もあるようですので、合同研修会をしたのをきっかけに研修などをするといった関係をこの後もずっと続けておられる学校があるというのを教育新聞で読みました。このような事例もあるので、若桜学園においても、こういった取り組みを進めていただいて、色々な園での繋がりや、外部からの刺激等を積極的に取り入れていただいて、山村であるから、小規模校であるから遅れているのだといったことが思われるようなことがあってはいけないと思うので、そういう取り組みを進めていただけたらなと思います。ICTや英語教育はパッと目立つ部分であるし、社会的にもニーズがずっと続けて高いものです。若桜は小中なのですけれども、高校に進学する時点でという目標などがはっきりすればそこでまた中学校の時点で頑張る訳ですので、東京とかですとスピーキングの試験が中学校統一であるということで先だって実施されたと聞いております。他と比べても町村でもそういうことに目を向けて頑張っていますというようなアピール、実際にアピールだけではなく力をつける必要があるのですけれど、やはりそういった方向にも取り組んでいただけたらなと思います。

盛田教育長　若桜を候補に色々検討される方々が、どういったニーズがあるのかということを把握することは必要だと思います。例えば田舎から田舎に引っ越してこようと思って選んでおられるのか、都会から若桜の方にということで選んでおられるのかいろんな方がおられると思うので、そういった方々が若桜をどうだろうなと見られたときに、若桜の売りとして、また教育内容としてそういう取り組みというのが一つ売りになると思います。また、森岡委員が言われたような例えば自然環境だとかそういった体験といったものも若桜の売りになると思いますので、若桜へ来ればこういう教育を受けられて、なおかつ自然を使ってこういった体験ができるといった検討していただける材料を上手に発信していくというのは大事だろうなと思います。ありがとうございました。

上川町長　少人数のメリットということについてなのですが、この間台湾に行ったのですけれども、まずは子ども同士の交流をしましょうということで、台湾の横山郷の小学校2校で早速来年の3月に6年生を派遣したいという話が出てきました。積極的に取り組みたいということだったのですけれども、逆にこちらから行く場合も、子どもの数が少なけ

れば全員行かせることも出来るので、若桜学園の子どもたちは在学中に海外へ行けるといったメリットもあるかもしれません。メリットの一つの例として海外経験を今後考えていったらいいのかなと思います。

（2） 部活動の地域移行について

西田補佐 町としての資料というよりは、県の方の推進政策を冊子にして出しております。令和７年度までが国の改革推進期間ということで、公立中学校の休日部活動の移行を進めていくという動きを今、しております。その中で冊子２ページの基本方針を見ていただいたら大体よく分かるのかなと思いますが、休日の活動を、地域に連携した地域移行をしていくということを動かしていく方向で、すでに自治体や国など全体を見ていくと、そういう都道府県もあるということなのですけれども、若桜町と近隣の町村に聞いてみているのですが、なかなか上手くいっていないというような事を聞きます。１番は受け皿の問題かなとは思っているのですが、町としてまず、部活をどのように移行していくかという協議会を来年度に揃えて検討していくという期間に入りたいと思っております。今その要綱などを作っているところで、町の色々な体育協会や若桜クラブ等そういうメンバーを集めて、それから学園の先生も集めてもらって計画を立てていきたいなと思っておりますが、併せて学校の部活動についても、今ある部活動は限られた部活動ですので、部活動のあり方についても話し合っていくといいのかなというふうに思っております。ですので、本年度のうちには人選をして、来年度をスタートできるようにしたいなというような計画でいます。

その中で、少し１つ情報提供なのですが、小学校の方が八頭郡の小体連を本年度で終わりますと言われました。まだ公にはされていないですが、そういうような方向で今話が進んでいるということを聞いています。もう陸上大会や水泳大会はなくなるということですね、これは体育の方に限っていえばということなのですが、じゃあ地域移行と併せて考えたときに、運動部に入る子がどれくらい増えていくのかなということを少し懸念している所であります。もしかしたら、中学校の地域移行だけを考えるのではなく、小学校のからの受け皿というのも考えていかないといけないのかなと思っていますし、もっと言えば、高校の部活動を見ていても入っている部員数が減っている。協議会自体が中々成り立たない、先生がいないとか役員がいないとかそういう事が少し出ていて、非常に人口が少ない鳥取県では困難な条件になっています。

そういうことを含めながら、今後若桜町の地域移行をどうしていくかということを考えていきたいですし、それから若桜町だけでは到底できないところもあると思いますの

で、近隣の八頭町、八頭郡辺りも含めてどういうふうに連携していくかということも検討していきたいなと考えています。私の方からは以上です。

山口総務課長　来年度、協議会の設立をされて協議を進めていくというような話でございました。また、なかなか受け皿がないというような実態もあるとの事でございます。これにつきまして皆さんのご意見をいただけたらなと思います。

盛田教育長　補足させてもらってもいいですか？県が出している資料の２ページをちょっと見ていただくと、真ん中あたりに四角囲みがあります。地域移行について今、県が３つの形を考えています。

１つは米印の上です。地域移行型とはという所があって、休日は学校での部活動を行わないで地域でやっているそういった所に子どもたちが出かけていく、子どもが地域の方に移動していく、そういったような地域移行です。

２つ目の米印の拠点校型、合同部活動というのは、学校部活動なのですけれども、例えば野球の出来る先生がＡ校にいればＡ、Ｂ、Ｃ校のみんなはＡ校に行って習う。バレーの得意な先生がＢ校にいればＡ、Ｂ、Ｃ校のバレー部がＢ校に行って習うみたいな、そういう子どもたちがどこかの学校に行って一緒に部活動をやるというものです。ですから、これは学校部活動という形は変わらないです。

３つ目は地域連携型という米印がありますけれども、これは今まで通り学校での部活動をするのですけれども、指導者は先生ではなく、外部の人がやって来て指導をするというような、派遣をする形ということです。極端に言うと、少年野球やスポ少みたいな感じで地域の方が指導にやってこられて平日は先生が指導し、休日は地域の方が指導してくださるといった形です。

どういった形にしていくのが望ましいのかなというのがありますし、４ページを見ていただくと、市町村の役割というのが２番にあります。この市町村の役割の中の（２）関係者等ということで令和５年度中に協議会の設置をするということで、その協議会において具体的な方針だとか、取り組み、スケジュールについて検討していくということで、地域によっては東中西部などの単位でそういった協議会を設置する事があるかなということもあります。若桜町では先ほど西田補佐の方から話があったように、若桜町の協議会の方を来年度設置したいなと思います。それから、この間東部１市４町と東部教育局を交えた教育長の会の中で、情報交換の場として、東部地区の協議会のようなものを持ってそれぞれの市町の進捗状況なり、連携できることがあれば連携していくような、そういった協議会を立ち上げようかと話をしたところです。

森岡委員　若桜は近隣に学校がないということもあるので、若桜独自で考えていくのが良

いのかなという思いもあります。若桜には、総合型の若桜クラブがありますので、そこが主体となってどう対応がやっていけるのかなということを考えていけたら良いなと思います。けれども、学校に指導者がいないといけないという所で、指導者が居らず対応できない部分は今からでも育てていくことも出来るのではないかなと思いますので、今ある部活は卓球とテニスと吹奏楽ということなのですけれども、卓球にしてもテニスにしても町内に経験者の方がたくさんおられると思うので、そういう方々に協力いただいて、指導者資格が必要なら指導者資格を取ってもらう形を若桜クラブが主体となってやっていくのが良いのではないかなと思います。若桜クラブでというのが難しいのでしょうか。学校に指導者を導入した方が良いのか、若桜クラブで受け入れて学校の外でやっていくのが良いのか。学校に行くにしても若桜クラブから指導者を派遣していけばいいのかなと思うので、出来るだけ地域の方が関わる形の方が地域としてもより良いのかなとも思います。地域の方で指導者になっていただけるような方にお願いしてやっていくのが身近でいのかなと思っていますが、どうなのでしょうか。

小林次長　若桜クラブは確かにあり、地域移行についての話もさせてもらっていますが、今のところはまだ具体的にお返事を貰っているわけではないです。また、まだ動きが見えていなかったということもあり、その辺りもまだ詰められていないというのが現状です。

盛田教育長　部活の地域移行について色々と検討しなくてはいけない事がたくさんあります。

一つは１番の議題が大きくはまっていて、結局部活の地域移行をするこれから先、令和７年度までに休日の部活を地域移行にということがあるのですけれども、令和８年度以降は平日の部活の地域移行を検討されています。そうなると、一週間地域で全部見てもらえるのか、そういった指導者がいるのかどうか、土日だけや、１日くらいなら見てあげられるのだけれどといったかたちですよね。ですので、先を見据えたところでの移行というのを考えていかなくてはいけないなということが一つ。

それから先ほどの議題の中にあった１０年後には２０人ぐらいになる中で、卓球や吹奏楽といった今の部活自体がそもそも成り立つのか、そういった再編みたいなことは必要かもしれません。ですから、色々なところで状況を見ながらどこにどう来ていただくのが良いのかなと検討が必要になってくるのかなと思います。まだそういった所を話し合っていくのが協議会といいましょうか、今の状況なり、方向性を示していくのが良いのかなというのと、特にこれから中学生に上がってくる保護者の皆さんも内部に入ってこなくてはいけないかなという気持ちです。以上です。

森岡委員　その辺りの説明を保護者の方は凄く待っておられます。どうなっていくのだろ

うと保護者の方もすごく不安に思っておられて、聞かれるのだけれども私も答えることができないし、まだちょっととしか言えないです。去年もこういった話が上がっていたのだけれども、何かの機会に校長先生がとりあえず来年度は今のままの体制で行きますと示してくださったので、そこで保護者の方々は納得して今年度過ごしているのだけれども、また、来年度はどうなのだ？という声も聞きますので、ちょっと早めに方向性だけでも示してあげないと保護者が不安になるなというのを感じます。吹奏楽も先生が居られないというのはよく耳にしていたのですけれども、保護者の方から、以前勤めておられた西川先生が、今はもう職員を辞めておられるのですけれども、今だったらそういう協力も出来るよと言っておられたよと伺いましたので、声をかけたらもしかしたら協力してくださるかもしれないです。指導員の受入れをする際に吹奏楽などは指導資格などがあるのですかね？例えば OB に来てもらって指導をしてもらうというような事にはならないのですかね？

西田補佐　外部指導者や、部活指導員は体育の関係は補助金が出たり研修会があったりするのですけれども、文化部のものが一切来ないのですよね、その辺りを小中各課に聞いてみないといけないのですけれど、どうもこの部活動の地域移行については最初に体育的なものが出てその後を追いかけるように文化部の関係のものが出てくるという関係なので、なかなか進んでいないのだろうなと思います。

森岡委員　体育はテニスとか卓球とかというのは指導者資格が必要ですか？

西田補佐　外部指導者を活用されている自治体もありますし、指導者資格の研修を受けなくてはいけないです。部活動のガイドラインを遵守するという事が大前提なので、そこの研修があります。資格まではどうだったか把握はしていないです。

森岡委員　スキーの関係で私の所属しているフロンティアスキークラブというのがあるのですけれども、他所の学校からそこの生徒の子を学校では対応が出来ないからこの機会に外部指導者としてフロンティアを登録してくれないかということをお願いされて、申請し通過して部として認定された部分もあります。そこにはスキーの指導者というのがいて規約を提出して、そこなら部活として学校が委託できると、受け入れは出来ているのですけれど、でもそれなりに審査もしっかりあって書類などを提出したのはあるけれどテニスにしても卓球にしても若桜クラブが請負すればできるのではないかと思います。個人的な意見ですけれども出来そうな気はします。そういった形が一番近いのではないかなと思っています。

西田補佐　今、クラブチームの中体連受入れを OK にしています。先ほど審査の話があり、フロンティアもその一つだと思うのですけれども、かなりのクラブチームが申請されて

います。一番ネックになっている所が部活動のガイドラインについてです。例えばスイミングなんかは一つしか登録されていません。それは選手を強くしていく、強化していくというスイミング本来の目的があって、それを守ると多分部活動のガイドラインは難しいということで最初から受けていないという実態があります。そうではなくて、週に２回休む、１回の時間が２時間や１時間半というのをきちんと守れている所は申請ができます。例えば卓球のクラブが、今現在きちんとした組織であって中学生を受け入れていて、部活動のガイドラインを守っているということであれば、そのクラブチームとして登録の申請を出すことができるのですが、今がそういう状態ではないので、おそらく今の状態であれば若桜学園という名前で外部の人が協力をしていくというパターンが来年は想定されるかなと思っております。もしそのようにするのであればという事も含めて検討の協議会を持つという事なので、こういうふうに完全に移行していくパターンになるとそれを経てからかなと思っています。

盛田教育長　はっきり言える事は、来年は協議会を立ち上げて検討していくということです。なので、来年度については、部活の地域移行は今のままやっている通りで進めていくことは大前提なのだろうなと思います。その協議会の中で方針が出て、それで移行が６年度になるのか、あるいは７年度になるのか分かりませんけれど、合っているものから良くしていくのかなという所かなと思います。令和５年度からすぐ移行というのはちょっと難しいと思います。今年の状況を見て言うと、学校以外に中体連が認めた、要は外部団体がいっぱいできたのですよね、子どもたちの中には、平日は卓球をしているけれど、休日は野球をしているなど、そういう事があって例えば、中体連の大会に出るときには野球で出ますので、中学校では出ませんというのがあります。そうすると卓球でペアを組んでいた子が実は出ない、ペアが居なくなったとかですね、そのようなことがあったり、他にも９人しかいない野球部の中の２，３人とかがクラブチームの方に行ってしまったので、結局残ったのは６人くらいでチームが組めなくなって６人とも大会に出場ができなくなったりしてしまったということが実際に起こっている状況です。ですので、例えば若桜クラブに地域移行したとしたら今度は若桜学園の選手としてではなく若桜クラブの選手として出るというのは当然ありえます。そうなると、平日同じ卓球をしていても若桜クラブの卓球チームとして出ますという事がひょっとしたら出てくるかもしれない。いろんなパターンがこれからも出てくると思うので、そういう所を含めて検討していかなくてはいけないのかなと思います。

森岡委員　もう一つ聞いた話は、市内の陸上部の者の話だったのですが、外部移行してクラブチームに所属し、全国大会の資格を得て全国に派遣されたのですが、その時に学校所属

ではないので学校からはお金が出ない、クラブチームからもお金が出なかったので自分の分とクラブの指導者分の費用全てが保護者負担になったと聞きました。それも何だか可哀想だなと、体制が今まで部活としてやって来ていたのが、外部のクラブの所属したことで、全部が保護者の負担になってしまったというのを耳にしたので、その辺の体制も考えていかなくてはいけないのかなと思います。部活は外部のクラブに委託して、手を離れているから学校としてはお金を出すことはできないという返答だったとのことだったので、その辺が難しいなと思いました。

西田補佐　同じようなケースが水泳でもありまして、米子の方で学年別という大会があるのですけれども、これは水泳連盟が主催の大会でして中体連じゃないのですね、ですので学校で出てもいいですし、自分の入っている所属チームで出てもいいですよという選択ができました。その時にどうも同じような事例でトラブルが起きたようです。学校はバスで行くので、帰りのバスに乗せて欲しいと言われたのだけれども、あなたは所属チームで出ているでしょうという事で保護者と学校が揉めていたという事を聞きました。そこが筋なのだろうなと思っているのですけれども、今自分の子がどちらで出ているのかが大事な事であって、ただ、部活をするクラブ団体が同一町内、例えば若桜の場合だったら若桜の教育委員会が関わっている所になると思うので何らかの補助金が出てくるなと思ったりするのですけど、大きな市になるとそこはそこでやっている所だからという考え方になるのかなと思ったりしています。

森岡委員　大会としては学校の総体でもそのようなことになってしまうという事ですか？

西田補佐　ですね、クラブチームで出たところとか部活外活動で出られた、本来の部活ではないのですけれど、この大会のために普段はスクールでしている子が出る、学校の名前を使ってください、でも引率は保護者でお願いしますという学校もあったようです。色々な形があって少し複雑化しているかなと思います。

永原委員　以前から、学校の部活をしながらクラブチームに所属していた子は若桜にも沢山いました。野球とか。そういう生徒はいわゆる中体連主催の総体等にはあまり関心がなく所属しているバスケ部等の一員として、大して活躍できなくてもそれはそれという感じでした。硬式の野球がしたい子にとっては、クラブチームの大会が本命であって、ダブルスタンダードのような例が長い事中学校にはありました。一線引く理由も分かる一方で、せっかく得た切符なのに、指導者の分まで負担するのが大変だから出られないというのも気の毒です。高校ならわかるけれども、義務教育の段階でどこまでを公的なものとして支えていくかは難しい問題だと頭を抱えます。

西田補佐　地域移行の前に中体連へのクラブチームの参加が認められだしたというのが少

し複雑にさせてしまったのかなと思っています。ですから今、国から話が出ているのは県を跨いでいる参加者、例えば島根県の子が米子のサッカークラブに入っていて試合に出た場合どうするのだという話だとか、そういう事も断続的に国の方はして欲しいと多分要請してくると思うのですが、県内の方ではまだそこまでは整理できていないのだろうなと思いますし、そういう問題も起きています。

盛田教育長　特にその外部、学校外の合同チームみたいな、特に集団とかだと、それが次の大会に行ったとき、例えば野球のチームが優勝して県大会に出る、次の大会に出るっていった時に若桜町の３人だけには補助金が出るけれど、合同チームで他町村の子どもには補助金が出ないとなれば、やはりその辺が補助を出すにしても難しい所ではあるのかなと思います。一言一句これはこうしていきましょうと言わないと答えがないと言いますか。

永原委員　もう一つ、これは大人の話です。私は子どもの感覚はどうなるのかなと思います。月曜日から金曜日まで学校の先生に習って、土日で、また違う先生に習う、子どもたちの中でどちらが先生なのだろう？と思ったりすることはないのだろうかと思いました。以前だったら若桜で卓球している子が夜は地域の卓球で鍛えてもらって、それも力にして学校の部活として出場していました。それはそれで問題なく、スッキリしていました。今のように対等というかクラブチームも何も混然一体となっていると、子どもの感覚はどうなるのかなと思ったりして、生徒の身になってみると難しい問題があるなと思いました。土日だけ見てくださる地域の方と、先生とが物凄く綿密に連絡を取ることができるかと言ったら、現実厳しいなと思ったりしますし、方針が一貫していたら良いけれど、全く違っていた場合はどうなのだろうとか、言っている事が全く逆といったことが生じないかとか、そんなことも思ったりしました。体制の問題もあるし、子どもにどのように考え方を浸透させるのかも難しい事の一つだと思います。

上川町長　県の教育長さんとその話をした際に、運動部でも違った先生に習うというのは混乱する場合があるのでしょうけれども、特に吹奏楽部などは先生の指導の仕方が違ったりして、先生が違うと指導が違うので難しいなと思います。また、子どもの目線で見たときに、どうなのかなというのはあります。

森岡委員　もう一つ思いがあって、近い所でやりたいという思いも凄く大きいのですけれども、町が変わるし、足を何とかしなくてはいけないという問題はあるけれども、八頭中学校さんのクラブに参加して、そっちで活動するようにしたら、部活もたくさん選ぶことができるし、交流も深まるので、今若桜の問題になっている高校ギャップというのも、そこで交流ができていたらクリアされる部分もあるのかなと思います。ただ平日の行きか

たを考えると難しいのだろうなと思っています。八頭中学校さんは凄く大きい学校なので、そこの部活動で一緒になったチームで出る形というのも、それはそれでいい面があるのかなという感じはします。

上川町長　色んな問題が今あぶり出された感じです。来年度協議会を作る中で、今出された意見なんかを一つずつ整理しながら検討していくことになると思います。

山口総務課長　続いてふるさと教育についてという事で、説明していただけたらなと思います。

（3）ふるさと教育について

西田補佐　こちらも私の方が説明させてもらいます。説明資料というよりは、学校の取り組みの状況をまとめさせてもらいました。

鳥取県のふるさとキャリア教育という事で推進しています。その中で特に中心となるのが総合的な学習という時間の内容になると思いますが、他の学習でもふるさと教育というものをしていると思います。この中で総合的な学習の全体計画という事と、それからA3にしてあるものが、各学年がどういう事に取り組んでいるかという事をまとめた年間指導計画で、総合的な学習は毎年これをこの学年でするという事ではないです。例えば、階段アートの話が先ほど出ましたけれども、これは 6 年生の時から続いて、行政の方が予算を付けてくださったという事になって実施したという事になりますが、例えば今の８年生や９年生が７年生に時にしたこと、８年生の時にしたことは違っていると思いますので、小学校の所はただベースになるところなのであまり大きな変わりはないかなと思うのですが、このような形で若桜の町をフィールドにした学習を取りくんでいます。その後、先ほど話がありましたが学園の９年生が今年、総合的な学習で取り組んだものを新聞記事やネットニュースに載ったものをこちらに出させていただいております。あと、子どもシンポジウムも含めてまとめさせていただきました。

特に中学生なのですが、中学生の段階というのは中々フィールドに出て学習することが少ないです。その中で他の市町と話をした中で若桜学園というのは本当に外に出て学習をしている、地域の人に協力を得ながらしてもらっています。地域学協力活動推進員さんもおられますし、そこをコーディネートしてもらいながら、色々な計画を立ててできているのではないかなと思います。

課題というか、ふるさとキャリア教育の県の方の会でも上がったのですが、この学習で将来子どもたちがこの地元に戻ってここで住んでくれるようになったら良いなとは思うのですが、例えば観光だけに目を向けても多分それはダメで、自分たちが帰って来た時に

住める、生きていける、生活をしていけるというような事や、あるいは人と人との繋がりがあるという事を体験していかないといけないのかなと思います。そういう面では、人と触れている、地域の方と触れているというのはすごく大事な事かなと思いますし、これから今度は若桜をどういうふうに町を持続させていくかという事まで触れていくと良いのかなと思います。

それから、一つアイデアとして、昨年度４年生の教材を作らせてもらいました、若桜宿内のものですね、この宿内の学習を通して、イメージとしては例えば高校生ボランティアになった時にガイドをするとか、観光ガイドはおられるのですけれども、高校生でもできると思うのですね。そこを勉強してガイドをするとか、中学生でもできると思います。ちょっと想定できるかなと思っていますし、その学習だけで終わるのではなく、自分たちが学園を離れた後も活かせるような学習になっていけば良いかなと思っています。以上です。

山口総務課長　ありがとうございました。将来、若桜で生活できるような学習をしておられると、様々なことに今後も取り組んでいくという事でした。このことについてご意見があればお願いします。

上川町長　今年はいろんなイベントがコロナ前のような形で復活して色々やってきたのですが、特に学園の児童生徒にたくさん出演していただいて盛り上げていただいたなと思っておりまして、樹氷太鼓が色んな所で行われました。それこそ小学生から中学生まで皆が縦割りで取り組んでおられました。この間の鬼っ子まつりでの傘踊りの時も皆さんが活き活きと一丸となっていました。そういう縦割りの、学年を超えて行う樹氷太鼓は、一つのツールとして定着していて凄いなと思います。人と人との繋がりという意味でも本当に素晴らしいと思います。地域のイベントにどんどん子どもたちが出てくるというのが、良いことだと思います。

永原委員　地域に子どもたちが出ていくと、大人も喜ぶのですが、子どもも凄く育つような気がしていて、今は９年生が運動会のお手伝いをするとか、太鼓がイベントに参加するなどしています。ずっと前に若桜中学校に行っていたときに音楽の先生が「吹奏楽をあまり外に出していくことは無かったのだけれども、今年初めて敬老会に出させたら、そこから物凄く子どもたちの成長が著しくて、これからは上手下手とかそういう事ではなくて、外に出そうと思いました」と言われました。自分としては、あまり大規模な吹奏楽部でもないし、コンクールでそんなに良い成績を残しているわけでもない、と少し控えられていたのですが、勇気を出して出たら、反響もあるし子どもたちも自信を得たとそこから先生も変わられたのです。それ以降はいろんな所に出そうとされるようになりました。人前で何

かするというのはすごく緊張することでもあるけれども、子どもを大きく育てるなと思います。発表の機会を与えてくださるというのは本当にいいなと思います。だから子どもをもっといろんな行事に出させる機会を持った方が良いのかなと私は思っています。それこそ以前、若桜が部活に熱心だった頃は、先生方は土日には部活を優先させたいという気持ちが強く、とても地域のイベントには出せないという空気がありました。だから、新人戦や総体の前はなおさらでした。こうやって部活が学校から離れていくような環境になったら逆に地域に引き寄せる良いチャンスかなと思います。顧問に遠慮して、ほんとは出て欲しいけど、言いづらいということがなくなるのではないかと思います。子どもをいっそう地域で育てる機会が巡ってきたと考えられなくはないかなと私は思っています。

西田補佐　１０年ほど前、大学院に行っていたときに丁度ゼミについていた先生が南部町の一式飾りを調べておられて、僕たちも付いていったのですけれども、中学生が一式飾りをするというプログラムがあって、そこに地域の人が入ってきて、指導をされながら、例えば食器一式で見立てるというか作られるのですけれども、そういうのを見ながらこれがやはりふるさと学習だなと思って、見させてもらったので、祭りとかそういう所に目を向けるのは他にもあるのかなと思います。まだ切り口は沢山あって、若桜鉄道でもいいと思いますし、地域のために何か将来自分たちが働きかけられるようなことがあればいいなと思いました。

盛田教育長　鳥取県がふるさとキャリア教育という造語を作っていて、これは継続的に先まで残していくような高校までパスポートのようなものがあるのです。ふるさとキャリア教育という言葉を作ったのは、若桜ではふるさと教育と言っているのだけれども、同じような意味合いで使われていて、低学年のうちは、ふるさと教育という所で知るという、要は自分の中で自分の住んでいる町はこんな所なのだと、理科だったり社会だったりを通しながら知っていくというのが低学年のうちというか、それがだんだん高学年になり、中学校になっていくとそこの中で自分がどう関われるかという、今度はどう働きかけられるかなと最後のキャリア教育という所が育っていく頃には、自分がこの町とどう関わっていきたい、そういう所を導き出すというようなキャリア教育の形で、これが資料３に書かれている各テーマというのが真ん中あたりにあるのですけれど、テーマも知るという所から始まって、最後自分たちはこの町とどうかかわっていくのかという所でアウトプットしていく、それが先ほど新聞記事だったり３年生や、４年生だったりそういう町との関わりということで浸透していくのだと思っています。そういった活動というのを通しながら、卒業した後この町にどのように関わっていくのか？という事を卒業までにはしっかり考えて欲しいなと思います。今西田補佐が説明したように中心になっているの

が総合的な学習です。ですので、子どもと先生で話し合いながら活動を作っていく、探究的な活動なので、先ほど説明のあった通り毎年同じことをしている訳では無くて、計画がどんどん変わっていったりします。ですので、子どもたちと先生とで若桜について何をテーマにして学習するのかというのは毎年変わっていると思います。それが若桜鉄道に興味を持つことがあったり、職に興味を持つことがあったりという事でテーマが変わっていくと思うのですけれども、究極の所は若桜とどう関わっていくのかという所がテーマということで、それがたまたま職だったり、観光だったりかもしれません。そんなふうに見ていただけたらなと思います。

伊井野委員　夏休み中は蔵通りに行燈を並べますという行事に中学生の女の子が参加して和紙の貼り方などを習って作ってくれたそうです。このようにちょっとしたことでも、手伝ってみようか、やってみようかという気持ちがある子どもが参加してくれたのだなと、いい環境だなと思いました。台ふうの影響で並べたのをすぐに撤去したようで残念でしたけれども。若桜は少し小さい町なので、すぐに地域の事に参加できる。私の鳥取の孫はそんなことがないし、和太鼓などあれば入らせたいがそのようなことはやっていないからなと思う。若桜にはそのような良い所がたくさんあると思います。

森岡委員　高校生ボランティアに取り組んでもらって、何人かグループに参加してくれて、すごく沢山イベントの手伝いをしてくれました。たくみの館の子ども縁日や鬼っ子まつりやふれあい祭りもそうですし秋のイベントが忙しい中で、ちょっとしたイベントにも依頼したところ快く来てくれて、すごく楽しみながら参加してくれている姿があったので、今まではこのような教育は中学校で途切れていて、高校生はあまり活躍をする場がなかったのですけれども、その繋がりができていて、今まで声をかけてもらえていなかったので、出たい気持ちはあったのだけれども出られないといった子どもたちが、今回参加してくれたのかなと思っています。すごく良い繋がりができたので、これが良い形でどんどん広がって繋がっていけば、今は高校生の子たちが大人になっても来てくれるのかなと思いながらお願いしているのですけれども、本人たちが楽しみながらイベントを手伝っているので、きっとこの子たちは大きくなっても手伝ってくれる、関わってくれるだろうなと期待しています。

上川町長　運動会の時にも高校生ボランティアに手伝ってもらったのですけれども、その時に高校生ボランティアの子が写真を撮ってくれて、それを広報の表紙に使わせてもらいました。早速今年度から色々なところで活躍していただいています。本当に素晴らしいなと思います。先ほども西田先生の方からも、学んだことで高校生ガイドをするなど、活かすという発想で、小中高大と地元の関わっていただけるような流れができてくると良

いなと思います。

山口総務課長　では、次に移らせていただいてもいいですかね？鬼ヶ城の整備と活用についてという事で、説明をお願いします。

（3）　鬼ヶ城の整備と活用について

岡﨑補佐　そうしましたら、資料４をご覧ください。教育委員会の方で活用のための整備という事で観光客に来ていただけるかという事で、整備を続けてきております。令和４年度と今年度に鬼ヶ城の三の丸から宿内を見下ろす所ですね、資料に写真を付けております。令和４年度の方は正面の所を伐採しております。今年度はその見下ろして左手の辺りを伐採しております。下から見ても凄くすっきりしたなと分かるのですが、上から見ていただいたら、眼下に広がるパノラマ的な景色が非常に良くなったかなと思っております。令和６年度については見下ろして右手側に杉が生えていまして、そこがちょうど巻米口や学園の方を見下ろす所になるのですけれども、そこら辺の景観の支障木の伐採というのを計画している所であります。

令和４年度、５年度と滋賀県立大学の中井先生に来ていただいて若桜鬼ヶ城ツアーを行っております。２０名の募集に対して最終的には３１名、何名かお断りもしながらも大変盛況でした。天気も良く、皆さんに歩いていただきました。参加者は町内よりも町外の方の方が多いような状況で、こういった山城というものに興味を持った方が遠くは境港市の方から来られているなど、大変満足して帰られていました。中井先生が来られた時に色々と相談させていただいておりますし、この景観支障木だけではなくて、登山道等を含めて全体を教育委員会の方で見て回っております。実際に活用していくとなれば、ツアーなどは観光協会の方がお客ようを引っ張って来るのですが、今後はそういった所も観光協会の意見を聞きながら、さらなる整備を進めていかなくてはいけないなと思っております。中井先生がこの前来ていただいていた際のお話の中にもありましたが、このお城というのは若桜のルーツだと、ここが交通の所でお城があるからこそ、若桜が発展して人が住んだのでもっと皆さんに親しみを持ってもらいたい。との事なのですけれども、今はコアなファンに仕向けているような所で、これを広く町民をはじめ親しみを持ってもらえるような場所にする、その基盤を作るのは中々難しいという事なのですけれども、そういう事も取り組んでいかないといけないのかなというような思いを持っています。中井先生の方にも色々と意見をいただいて、山城に入ってイメージが膨らむように、想定される復元イラストみたいなのを作ってみたら、もっと実際にイメージを持って、若桜にどんな鬼ヶ城があったのかというイメージが湧きにくいと中々親しみが持ちにくいなという話

もありました。来年度も中井先生のツアーをお願いしたいなと考えていますし、そういったことで今後も実際に来ていただける方が増えるような整備を進めていきたいと思っています。ただ、この間ツアーに参加された方から後日メールが入りまして、山城というのはそもそも攻められにくいから山にあるのだと、上りやすい山城などないので過度な整備は台無しにするというような意見をいただいたところで、そこら辺のバランスを見ながら、そうはいっても見ていただかないとだめですし、あまり整備しすぎた山城には魅力を感じないコアなファンの方々の事も考えながら引継ぎ活動のための整備を図っていきたいなと考えております。以上です。

山口総務課長　写真を見ていただきますと、眺望が良くなったのが分かると思います。整備等についても説明がありました。先ほどイメージ図という話もありましたけれども、城郭懇親会さんが著書された図があるように思っておりますし、そういった物も活用できるのではないかなと思っております。これだけ石垣のない城跡も珍しいというようなことで人気を受けている状況もあったりするので、その整備と観光と、なかなか難しい所があると思いますが、そういった所でのご意見をいただけたらなと思っておりますので、よろしくお願いします。

伊井野委員　この間のツアーは計画されてとても良かったと思います。私の父親も９３歳ですけれども、参加申し込みをしたら２０名までが参加人数だからダメだと断られたけれども、電話がかかって来て、たくさんの希望者があるので増やしましたと言われて参加出来ました。感想を聞いたら、中井先生の説明などを聞いてすごく良い勉強になったので、良いツアーだったと喜んでいました。このような企画をされたのは凄く良かったと思います。町外からもたくさん来られていたと言っておりました。

上川町長　先ほど、町民よりも町外の人の方が来られていたという事で、町民に良さを知ってもらうためにはどうしたらよいのか考えました。昔は小学生中学生が必ず春の鬼山遠足という催しで登っていたのですけれども、学園の子どもたちにも鬼ヶ城に登る機会をたくさん作ってもらえたら良いなと思います。写生会をするなど上で何か学校のイベントを行うのも良いと思います。そのような格好で鬼ヶ城を教育の一つのコンテンツとして活用していくのが良いかなと思いました。

伊井野委員　今言われた、全校遠足は必ず鬼ヶ城に全校生徒が上がっていましたけれども、年々広場が草や笹で埋まってしまってそれで止めることになったのです。私が若い頃に勤めていたときに１、２年くらいは上がっていたけれどもその後だんだん林になっていって止めることになったのですけれども、今は綺麗になって。

永原委員　若桜中学校の時に１年生も上がっていました。大山登山があるので、それの予行

練習としてではないけれども、なんでも１年生の子たちが上がって上から下に向かって「おーい」と声をかけたりするのが恒例行事としてありました。

伊井野委員　三倉から上がる道を低学年は上がって、高学年は高い学校からの道を上がるなどコースが分かれていました。

上川町長　教育長が言われていましたけれども、リスがいるらしいですね。

盛田教育長　そうですね、リスがいました。運が良ければ会えるといった感じです。山の遠足が、ずっと行われていたのですけれども、若桜だけではなく、ちょっと一時見直しになったのが、障がいのある子どもたちが、そこになかなか参加しにくいということがあったからです。例えば足が不自由だとか、車いすの子どもだとかが全校で上がる時に自分は行くことができないのですか？という問いに学校の方がどのように答えていくかなどというような見直しがあって、皆が行けるところはどこだろうなという事で場所を変えていったという背景が過去にありました。ですので、そういう教育的配慮の中で変わっていったという経緯もあるのだろうなと思います。ただ、今の若桜学園の状況を見て、それがどうかということはまた検討していただいて、上がれるようであれば上がっていただくことも出来ると思います。それからなんでも関連付けるのはあれなのですが、例えば奈良県奈良市が総合的な学習のふるさと学習で、外国から来た観光客の方々に奈良の大事さや、東大寺など色々なことについて観光案内をしようという事になり、それには英語が必要なので、英語で観光案内をする練習をして、一方通行ではいけないので、聞かれたら答えられるようにALTの先生に質問をして、質問を返してもらってそれに答えるというような練習をして現場に出ていくというようなことをしていました。そのようなことを思うと、例えば先ほどのふるさと教育の中の１つに歴史的なところが上手く当てはまれば、鬼ヶ城の歴史などを自分たちで学んで、それを第三者に伝えていこうというような発信の方法の一つとしてHPもあるかもしれないですし、ガイドみたいなこともあるかもしれませんし、色々な発信の方法があると思うのですけれども、ふるさと教育の中に鬼ヶ城を当てはめていくというのも一つの教材になるかなと思ったりしました。

永原委員　西田先生の作ってくださったあの本は本当によくできていました。県版の資料があるのですよ、それをそのまま置き換えられるなと思って、県だったら大山が取り上げてあるところを若桜だったら氷ノ山とか、歴史的建造物で倉吉の土蔵群が取り上げられている所を若桜は伝建の所など、あの資料を見ながら若桜には凄く沢山あるのだなと感じました。このまま英語にも繋げたりしながらできるともっと良いのかなと思いました。

西田補佐　子どもがこの鬼ヶ城をどのようにしたら身近に感じるのだろうかとずっと考えていたのですけれども、なにかストーリー仕立てのものだと良いのかなと思っていて、城

がそこにできて、壊されたというその辺が例えばストーリー的な漫画になるだとかそんなものがあれば、史実を隠してはいけないのですごく難しいのでしょうけれども、なにかそういうようなものがあれば子どもたちももっと身近に感じられると思います。

福田委員　二年位前かもしれないのですけれど、森田二郎先生が地域共同活動の中で、お寺さんの成り立ちについて一軒一軒繋げて子どもたちに教えておられたのですけれども、そういったことも、この誰が菩提寺で城主は誰だったかそういったような事と関係があって、その辺からも子どもたちは学習を深めているのかなと思っていますけれども。

永原委員　今先生が話されていて思ったのですけれども、私がずっと気になっているのは、そうやってせっかく良い道ができているのに、教育の継続性というか、先生が変わると全くガラッと変わってしまう場合があるという事です。私も後で資料を見たときにお寺巡りをしているなというのが分かったのですけれども、じゃあ次の先生が同じ学年を担当していてその先生がそれをするかと言われたら、そうとは限らないのです。去年も平和学習を７年生が広島や沖縄ではなくて若桜の人に戦争体験を聞くというのをしました。それで村山館長のお父さんとお母さんが来てくださって戦争があったがためにどのような生き方をしてきたかという事を語ってくださって、私は凄く良い平和学習だったなと思ったのですけれども、今年同じように７年生がするかというとそうはならなくて、学校の姿を見ていて、なかなか良い取り組みがあっても継続性が難しいなと思います。

福田委員　そのような学校の取り組みというのは記録として残されていているのですか？

永原委員　全体として残っているかは分からないけれども、残ってはいます。個人の先生のものになってしまっているのかなと思います。

福田委員　学校の物として残れば、引継の際にそれを見て繋げるというような事ができますか？

永原委員　学校がそのものの全体像を財産として使えるように、そのような物を持たれたら、その次の年はしなくてもさらに次の年の先生がじゃあこれをやってみようというような事があるかもしれないです。良い授業だと思うのに引き継がれていなくて残念だなと思います。なので、地域の人に学ぶ戦争体験みたいな時には、龍徳寺さんに行って疎開して来ておられた人がいた話や、その川でご飯をたくさん炊いて食べさせていたのですというような話を聞いたりして、そのような身近なところからでも学ぶことは沢山あるのにと思いました。

福田委員　では学年が変わって子どもが卒業しても、子どもたちが学習した足跡というのはちゃんと受け継がれていくように記録が残っていると、探究が深まっていくような、次の時に少人数でも代々受け継いだ学習内容があれば有効活用されていくと思います。そ

れと、中井先生だったと思うのですけれども、さくらホールでのシンポジウムの時に、資料館のようなものがあったら一層分かりやすいとおっしゃっていたのが凄く記憶に残っています。何かを建てるとなったら大変なのですが、既存の場所でもそういった鬼ヶ城の歴史を見られるような常設展示場みたいな所が町内にあると良いのではないかなと、そういった活用をしていただいて、町民の意識としても、若桜には鬼ヶ城があるぞというようになって欲しいです。結構シンポジウムなどにお邪魔しても、凄く人が多く感じたので、伝建にしても鬼ヶ城にしても割と皆さん関心があるのだなと思いましたし、足の悪い方には遠いので自分では行けないので乗せていってと言われたりした。

永原委員　たくみの館にもありましたよね？あれも結構人が多かったですね。

福田委員　皆さん関心はあるのだろうなと感じました。

上川町長　資料館は私もあると良いなと思います。鬼ヶ城と伝建セットでもいいと思うのですけれども常設的に見られるところがあれば。県外から来られても結局鬼ヶ城に行かれた後どうされているのか、そのまま帰っておられるのか分からないですけれども、例えば若桜宿の中にそのような資料館を置けばセットで観光もしてもらってお金も落としてもらえるし、一体的に鬼ヶ城と若桜宿を PR するような場所があると良いなと思います。

森岡委員　この夏に何年かぶりに上がって、各コースどうなっているのかなとあまり歩かないルートも周ってみたりした。昔小学校の時によく周っていた八幡さんは今使っているルートと、全然使われなくなったルートとまだ残っている物もあって、使わないとこうなるよなという現状でした。これに関しては登山道の整備という意味で進めてもらえたらいいのかなとは思っているのですけれども、上に廃屋になった東屋などがあったりしました。気になったのは電気柵が残っていて、外れてたるんでいたりする部分や、倒れてしまっている部分などがあったので、それが何の意味をしているのか分からないですけれども、電気が入っていないなら撤去した方が良いなと思います。あれは鹿避けなのですかね？

岡﨑補佐　鹿が入って石垣の周りの草を食べてしまって石垣が崩れるので、それの防止ですね。

森岡委員　なるほど石垣が崩れるのを守るためだったのですね、何かを守っているような感じでもなかったので気になっていました。それは確かに大切ですね。それならしっかり電気を流して、整備管理をしていかないといけないと思います。全然意味をなしていなかったので、ほったらかしといった感じで倒れているような部分があったので、その辺も併せて整備してもらえたらなと思いました。そして、下から歩きたいという観光ツアーの方もおられて、観光協会が主体となって何回か来られているのですけれども、登山道での事

故というのも実際にありましたし、歩いてみて、そんなに荒れているのかなと思うのだけれども、やはりお城好きな方がおられるわけで、普段登山されている方にとっては歩ける道ではあるけれども、やはり城目的で来られる方は靴も普通の滑りやすいスニーカーで来られたりすることがあるので、やはりそこを通って案内するのであれば、しっかり整備を進めないといけないと思います。ガイド目線で今回登って、少し上部の方で滑りやすいな、此処は難しいな、怖いなという所があったので、観光地としてそこを利用してもらうには最低限の整備をしていかなくてはいけないと感じました。見晴らしは本当に綺麗になっていて、伐採しているという事があまり頭になかったので、前からこんなに綺麗に見えていたかな？という印象で上から気持ちよく眺めさせてもらいました。凄く気持ちよかったので、町の人にもという所もお話があったので、今健康ブームでもあるので気軽なトレッキングではないですけれども、久松山などは健康のために毎日登られている方がおられたりしますので、そういった部分での鬼ヶ城の活動、ちょうど上がって下りてくるには久松山と同じくらいという時間的にも苦にならないルートかなと思いますので、そこにはもちろん整備が必要になってくるのですけれども、健康のために少しトレッキングしようという人たちも上がってきてもらえると、地域の人達にも上がってもらえるかなと思ったりしました。今のお城ブームでお城に興味がある人だけではない人にも、トレッキングブームに合わせて進めていくと、よりたくさんの人に上がってもらえるのではないかなと思いました。あと、上がってもらうとしたらトイレが必要で、トイレはこちらという看板があったので行ってみたら、馬場の所に簡易トイレがありました。ないよりはありがたいですけれども、やはりツアーでとかより多くの人に利用してもらうとなると、やはり上にしっかりとしたトイレが欲しいという目線で見させてもらいました。簡易トイレが置いてあったのは親切だなとは思いましたけれども、やはり簡易トイレだと使いにくいし、入りにくいという方が沢山おられるので、観光として進めていくのであればトイレというのは必要な部分だなと思います。

山口総務課長では、時間が少し過ぎましたが、町長何か最後にあればお願いします。

上川町長皆さん今日は色々意見を出していただきありがとうございました。現状の把握であったり色々課題の認識を共有できたりしたのが非常に良かったかなと思います。すぐ解決できないものもありましたし、来年度の予算に検討したらどうかというようなものもあったと思います。本当に有意義な２時間であったと思います。今後とも教育委員会と町政と協力して、子どもたちの教育環境を整備していきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

5.閉会（山口総務課長）

上記議事の顛末に相違ないことを証明する。

令和 6 年 2 月 26 日

議事録署名人 福田 浩子

議事録署名人 永原 直子